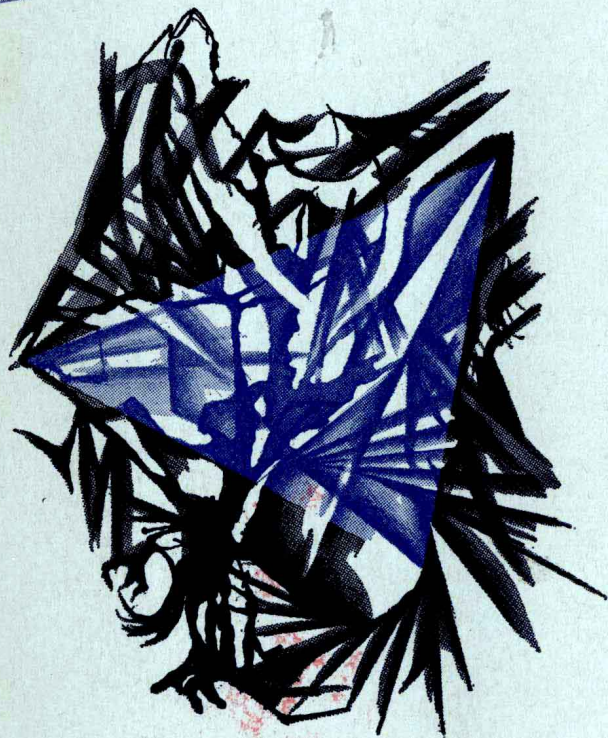


20
世紀
の
ロシア
小説

ワレリイ・ブリュースフ
南十字星共和国

ЗЕМНАЯ ОСЬ

草鹿外吉訳



白水社

訳者略歴

一九二八年生

一九五九年早大大学院博士課程卒

ロシア文学専攻

主要著書

「ソヴェト文学と現代」など

主要訳書

「エフトウノエンコ詩集」

「マヤコフスキー詩集」

「バステルナーク自伝」

「アクトノフ」

「同期生」

「ブリンキン」

「アガチョーフ叛乱史」など

二十世紀のロシア小説
南十字星共和国

4

訳者 © 草 鹿 外 吉

発行者 寺 村 五 一

印刷者 田 中 昭 三

発行所 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話東京(四)七八一一(代)

振替東京三三二二八

郵便番号一〇一

一九七三年一月一〇日印刷
一九七三年一月二三日発行

理想社印刷・加瀬製本

(分) 0397 (製) 75340 (出) 6911

南十字星共和国

Валерий Брюсов
Земная Ось
Скорпион
1911

世紀 の ロシア 小説

南十字星共和国

ワレリイ・ブリューソフ

草鹿外吉訳



白水社

装帧 山本美智代

アンドレイ・ペールイに捧げる

敵意と愛情の記念に

目次

いま、わたしが目ざめたとき……	65
塔の上	87
ベモーリ	101
大理石の首	115
初恋	129
防衛	143
南十字星共和国	161
姉妹	201
最後の殉教者たち	239
解説	269
序文	9
地下牢	11
鏡の中	39

序 文——第二版への序

本書第二版には、第一版（一九〇六年）をなしていた七つの短編がふくまれ、それらに、一九〇一年—一九〇七年の間にかけあげられ、それぞれ種々の雑誌や新聞に掲載された四つの短編がつけ加えられている。叙述方法、「手法」の共通性以外にも、さらにこれら十一の短編は、各編において様々な面から照らしだされているひとつの共通の思想により、統一されている。それは、現実の世界と想像の世界、「眠り」と「現^{うつ}」、「生活」と「ファンタジー」のあいだには明確な境界が存在しないという思想である。すなわち、われわれが日常、想像のものと見なしているものがあるいはこの世界の最高の現実性かもしれない、また、だれもが認めている現実性があるいはもっとも恐るべきうわごとかもしれない。

これらの短編とともに本書には、初版におけると同様に、未来の時代の生活に取材した戯曲『大地』が収められている。なぜなら、わたしはこの戯曲を、上演のためよりもむしろ読

んでもらうためにかかれたものとみなしているからである。（戯曲『大地』に関しては「解説」を参照されたい）

本書の短篇は、それらのかきあげられた年代の順番に配列されている。

「スコルピオン」出版社の申し出に応じて、その挿絵で本書を飾ってくれたイタリアの画家アルベルト・マルチーニ氏に深甚の謝意をのべなければならぬ。エドガー・ポーの作品のすばらしいイラストレーションを創造したアルベルト・マルチーニ氏は、本書の諸短篇とドラマ『大地』（氏はそれらを、ハンス・フォン・ウェーベル版のドイツ語訳で知っておられた）への挿絵において、作者自身も予知しえなかったところの多くのものを表わしてくれた。そしてわたしは、自分の散文の書がイタリアの画家のこの七枚の芸術的創造の生まれる契機となりえたことによって、わが身を仕合わせと感ずるしだいである。

一九一〇年

ワレリイ・ブリュソフ

地下牢——十六世紀初頭のイタリアの記録より

В подземной тюрьме

ふたつの帝国、十四の王国、二百の都市の侵略者にして征服者たるスルタン・マホメット二世は、ローマの聖ペテロ大寺院の祭壇の上でおのが愛馬に飼葉をはませんものと、誓いをたてた。スルタンの大宰相アフメト・パシャは、大軍を引具して海峡をおし渡り、陸と海とからオトラント市を包囲して、西暦一四八〇年六月二十六日、総攻撃を敢行しこれを占領した。勝利者たちの狂暴は抑えるところを知らず、かれらは、軍司令官のフランチェスコ・ラルゴの殿を鋸でひき殺し、武器をたずさえることのできる住民の多数を虐殺し、大主教をはじめ僧侶、修道僧のたぐいに、寺院寺院においてあらめる辱しめを加え、さらには高貴なる夫人、令嬢をつぎつぎと凌辱したのであった。

フランチェスコ・ラルゴの娘なる美姫ジュリアを、大宰相みずからが、おのれのハレムに連れ去ろうと欲した。しかし、誇り高いナポリ娘は、異教徒の囲いものとなることを肯んじなかった。大宰相がはじめて訪れたとき、彼女はこのトルコ人を迎えるのにあまりの侮蔑をもってしたため、大宰相は姫にたいして恐ろしい憤怒を燃えさからせたのである。もちろ

ん、アフメト・パシャにしてみれば、このか弱い娘の抵抗を力によって抑えることもできたのだが、一層むごい報復を加えんものと、市中の地下牢に姫を放り込むよう、命じたのであった。ナポリの為政者たちがこの地下牢に放り込んでいたのは、死にまさる苛酷な刑罰をあたえんと欲するような札つきの人殺し、きわめて罪深い悪党どもにかぎられていた。

ジュリアは、両手両足を太い縄でいましめられ、周囲を目かくしされた輿こしにのせられて、牢に運ばれていった。それというのも、トルコ人といえども、彼女の生まれと身分にふさわしいくばくかの尊敬を示さざるをえなかったからである。細い汚れた階段をつたって、姫は地下牢の底にひきずり降され、鉄の鎖で壁にくくりつけられてしまった。ジュリア姫には、リヨンの絹でできた豪華な衣裳が残されていたが、その他の身につけていた一切の宝石類ははぎとられてしまっていた。黄金の指輪や腕輪、真珠の頭飾り、ダイヤモンドのイヤリングなどである。なにものか、モロッコ皮の東方風の短靴までもとりあげてしまったので、ジュリアは裸足のままであった。

この牢獄は、市の城壁の天守楼の下、地中に掘りぬかれたものであった。太い鉄格子のはまったふたつの小さな窓が天井のすぐ下にあって、その先端の部分のみが、わずかに地上に

顔をのぞかせていた。それらの窓からさしこむごくわずかな光は、この牢獄に永遠の暗黒がたちこめず、囚人たちの暗闇になれた目が、おたがいを識別できる程度のものであった。石の壁には、がっしりした鉤^{かぎ}がうめこまれ、それには鎖と鉄の帯とが結ばれている。それらの帯は、囚人たちにまとわれ、しっかりと錠をかけられてしまっていた。

地下牢には、六人の囚人たちがいた。トルコ人たちは、そのだれひとりをも釈放しようとはしなかった。なんとなればかれらは、常に占領した国の風習を守るのをよしとしたからである。ジュリアは、妖術ならびに悪魔との交情^{とみ}の科で刑を得た老婆ヴァノツツアと、蒼ざめた青年マルコとのあいだにつなかれた。この青年は、市の為政者に反対する陰謀に参画した科で、もはや包囲戦がはじまってからここに投獄されたものである。

II

ジュリアは、閉じこめられてから最初の数時間は、死んだようになって横たわっていた。彼女は身を起こった事件の一切におびえきって、牢獄の息苦しくも悪臭にみちた空気のように喘いでいた。彼女は、生命が自分を見限ってくれるのを、刻一刻と待ちつづけていた。